

政治經濟學の根本問題

——實踐的情況に於ける價值判斷——

板垣與一

序

- 一、純粹經濟學の發展と政治經濟學への意志
- 二、存在論的價值判斷に就て
- 三、實踐的情況論

序

經濟學は生れながらにして實踐的任務をもつ。經濟學はその誕生に於てはすぐれて實踐的政治的性質を擔つてゐた。經濟學の實踐的性格はまさに運命的なものであつて、根柢から而してその對象の性質から實踐的である。かゝる經濟學の独自の實踐的課題は必然的にそのまなことを經濟生起の歴史的過程に向けなければならぬ。されば經濟學の根柢的な認識意志は鋭感なる歴史的關心であつて、これなくしては經濟學はその科學としての

存立の意味を全く喪失するものと云つて差支ない。經濟事象を動けるもの、生成變化するものとなす直觀、それと共にそれを實踐的形成的聯關として把握する根本的直觀を放棄することはできない。現代の經濟學者の中には恐らく餘りにもこの根本觀念を見失ひ、多くのものが現實的過程によそよそしく振舞ひ、一面的高揚によるかの羨むべき體系化に奔命し、現實的經濟過程全體の把住乃至は分析の道に外れつゝある。近來經濟學が或ひは理論經濟學として或ひは純粹經濟學として一般化し、歴史的過程としての經濟事象の諸形態並に諸聯關の把握に眼を蔽ひ、經濟學本來の性格的課題たる *Lebensfragen* に對する解答を無限の彼方に延期しつゝある狀況である。

されば吾々は今日一般に問はねばならぬ。吾々は歴史的過程の如何なる境位に投げ込まれてゐるのであらうかと。何を吾々は變革し、何處で吾々は制御し、如何なる可能なる方向に握取り得るであらうか。それに於て作用らく諸力、それに於て結ばれてゐる諸條件、それに於て吾々を方向づける可能性を知らんと欲する。かゝる複雑なる、危険なる、見渡し難き情況に於て吾々の實踐的方策の第一原理を知らんと欲する。一般的文化運動の直中に於て經濟過程の具體的歴史的全體情況の開示が決定的である。かゝる困難なる諸問題に答ふるものとして前代の科學體系的なる純粹經濟學の代りに歴史社會學としての政治經濟學への要求は必然的であるといはねばならぬ。

近代經濟學の成立はもとより經濟的思惟の自律、すなはち古代のポリス中世の神的秩序より解放された經濟そのものが手段たる地位より自己目的に轉位せし頃に始まる。それは永遠の彼岸の價值より現世的此岸の價值へのあの視野の移動、古いキリスト教的統一文化の解體を意味するところの近代ヨーロッパ精神の發展と共に始まる。現世的精神の結果としての生活諸形式の變革は一切の宗教的、藝術的、政治的、社會的、法律的、經濟的生活諸様式の變革をもたらし、科學的認識の諸形態も亦それ以外ではあり得なかつた。知識の世俗化は知識の基礎、目的、對象、方法の一切に亘つて現はれてくる。かゝる知識の世俗化は又同時に知識の統一性を解體する分化傾向を助長せしめ、事象はそれぞれ異なる方法觀點より分離孤立せしめられて別々に科學として觀察される。何よりも先づ自然科學、それに續いて諸文化科學が成立する。人は個々の文化領域を思想の中で島嶼化する。かゝる科學の個別化の傾向は更に一科學に於ける「部分諸科學」(Disziplinen)に分裂し、同一の對象に就いて更に別々の問題が取扱はれるのである。

このやうに具體的な對象の分解及びこれらの部分を更に特殊な諸科學の對象として取扱ふことは勢ひ自然現象を取扱ふ精密科學をその科學のパラダイグマたらしめるに至るのである。かゝる具體的對象の無限の分解過程は遂に知識の「精神離脱」(Entsehung)及び「靈性喪失」(Vergeistung)の状態を誘致するに至つた。かゝる

科學の分化に於ける歸結をゾムバルトは次の如き精彩ある筆致をもつて述べてゐる。「科學者が世界に抱く興味は、哲學者に於ける如く世界に對する愛から生ずるのでなく、世界に對して一定の距離を許す。科學の學者には世界の出來事に對する或る冷淡さが想應はしいのである。ニーチェの所謂「冷い認識の精」「科學的人間の人格的無關心」こそ望ましいのである。研究者はその研究自體は如何に熱く燃えて居らうとも冷やかに彼の材料に面して立つのである。冷やかに、批判的に。「批判主義」は總ての哲學の仇敵であらうとも純正な科學的精神なのである。哲學が愛、信仰、敬虔から築き上げられてゐるやうに、科學は冷靜、批判、不信によつて建てられてゐる。不信こそは科學の王國に於ける最高の徳である。かくして科學的な人間それ自身にとつては價値判斷を下すといふことこそ最も縁遠いことである。Non ridere, non lugere, sed intellegere 笑はず嘆かずたゞ知る事、これが研究者の標語である。」¹⁾

右に述べるが如き批判主義的精神のひたむきな發展はその動力因を十七、十八世紀に於て異常なる發展を遂げた自然科學の認識態度に求めたことは改めて論ずる要を見ない。この時代に於ける科學的精神とは自然科學的のそれに外ならず、近代人の哲學は科學也と言はれる場合の科學とはとりもなほさず自然科學的の意味に於て語られたのである。カントの偉大なる哲學體系も歸するところはニュートンの物理學の科學的根據だけを企圖せるものに外ならなかつた。而して認識のパラダイグマはあくまでも精密科學としての數學であり、一切の認識の方法態度は要素化、定量化、數學化であり、その秩序原理は普遍妥當的法則概念であつた。

1) W. Sombart, Die drei Nationalökonomien, 1930, S. 90.
尙此の部分の敘述についてはこの書の示唆に負ふところが多い

かゝる自然科学的認識態度は十八世紀の經濟學、ケネーよりスミスを経てリカアドウに至る西ヨーロッパ經濟學の共通の地盤であつたばかりでなしに、十九世紀後半に於ける獨逸經濟學に於ては限界利用學派の理論として、更にそれと略時を同じうして起れるローザンヌ學派の均衡理論として發展し、廿世紀に至りてもゾムバルトの所謂整序的經濟學、ザーリンの所謂體系的經濟學はそれ自身として強力なる自律的發展をなし遂げてゐるのである。

これらの整序的經濟學の總てに共通な根本的觀念はゾムバルトの要約するところによると、

一、整序的經濟學者は「科學」を研究する。彼等は在るものを認識しようとする。そして彼等の研究成果の普遍普當性に努力する。

二、彼等の意見に従へば、彼等が大抵經濟學をそれに數へる所の精神科學も自然科学も同じ認識基礎、同じ認識目標、同じ認識方法をもつてゐる。精密に云へば、彼等は自然の認識に於て試みられた方法は直ちに社會的、文化的な殊に經濟的な現象に應用され得るし又應用さるべきであるといふ見解なのである。メンガーはこの點に關して次のやうに云ふ、「理論的自然科学と理論的社會科學との間の對立は單に現象の對立に過ぎぬ。併し兩範圍の現象界とも理論的研究の現實的なる、並に精密なる方針が許されるのであるから決して方法の對立ではない」²⁾

三、自然科学はより完全なる科學である。その中でも「精密」自然科学が最も完全である。これは總ての科

2) C. Menger, Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der politischen Oekonomie insbesondere, 1883, S. 39.

學の科學的理想であり、又經濟學の、常に「理論」或は「純粹」理論といふ稱號に要求を掲げんとする部分の經濟學の科學的理想である。³⁾

更にシュンペーターの言を聽くならば、「純粹經濟學の最高の興味は、それが精密なる思惟の領域の擴張たる點に存するやうに思はれる。」となし更に「經濟學は他の知識領域よりも寧ろ精密自然科學に縁が深い」といふ意見なのである。

固より純粹經濟學の今日に至るまでの自律化過程には自ら充分なる理由をもつてゐる。すなはち十八世紀以後の市民的經濟社會の一義的自己法則的發展と共にその理論的表現たる經濟學的認識も亦經濟現象の自己法則性を與へられたるものとして受取ることによつて、重農學派並に古典學派に於けるが如く「經濟表」乃至は「自然價格」を中心とする經濟過程の規則性の外面的觀察、又奧太利學派に於けるが如く限界利用均等法則による經濟行爲の合理性の内的把握、更にローザンヌ學派に發する純粹化の作業は與へられたる諸條件の *ceteris paribus* の假定のもとに於ける經濟事象の單なる相關々係論的均衡理論の敘述にその歸趣を見るに至つた。

然し乍ら此の際認識方法には始めはやゝ弱き後には極めて強度の抽象が行はれることによつて、經濟現象が他の一切の歴史的社會的現象より切斷され、そして全く弧立せる統一的コスモスの形成過程として觀察された爲めに、歴史的社會的現實在としての經濟の考察は全く疎外されるに至つたのである。純粹經濟學にありては常に一定の與へられたる經濟的事象の相關々係的表現である爲めに、常に過程としての與件の變動は與へられ

3) W. Sombart, op. cit., S. 121—2.

4) J. Schumpeter, Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie, 1908. S. 563, 613.

たるものとして固定され括弧に入れられ、従つて經濟事象は何ら歴史的動的過程の裡に考察されず、經濟學の生得的實踐的課題も高々技術的應用的意味に解され、本來の歴史的的政治的實踐の任務に何等答ふる能力なきものに化しつゝあるのである。

然しかゝる事情はひとり經濟學についてのみあてはまる事情ではない。この關係は恰も隣接科學たる社會學の發達の經路を顧みる時は全く同一の過程形態を見出すであらう。社會學はコントによりて礎石を置かれたと見るのが通常であるが、コントにあつては、社會學的研究は文化一般の諸類型の區別又はそれらの發達の諸段階の確定に重點を置いたのであるからして、その意味に於ては社會學の起源は歴史哲學的研究と相伴つてゐたのである。然るにその後の社會學の發展は一般に他の諸科學の分化傾向の影響のもとに歴史哲學との關係を切斷されて、社會學独自の論理的性質を明かにすることによつて社會學の自律性が確立されるに至つた。このこと自身は確かにひとつの必然性をもつと云へる。それは云ふまでもなく社會學が出現の後、それ自身の科學的存立性の進展につれて優に自己の獨立性を主張し得るに至つたと同時に、又他の諸科學にも與へたと同様にカント哲學の批判的問題設定の與へた強き影響に基づいてゐるのである。特殊社會學としての形式社會學の理念がジムメルによつて主張されたことは決して偶然ではなく、その後繼續くフイアカント、ヴェキゼ等によつて仕上げられてこの形式社會學が完全に自己のアウトノミーを確保したこと、而して自己の固有なる限界内で諸問

題の提出とこれの解決に成功したこと、このことは吾々の等しく承認せねばならぬところであらう。

乍然かゝる自律化の結果形式社會學の科學の理念が極めて限局されたものであり、その爲めに多くの解決すべき問題が未解決のままに残つたり、或は問題の解決が歪められた形で強行されてゐることは否定出來ぬのである。蓋しこのことは形式社會學が如何にして自己の科學性を形成したかを顧みるならば一層明瞭である。形式社會學は自己の研究領域をば諸他の科學のそれから區別する爲めに、社會現象の一切の内容を捨象して「社會一般」に於ける單に「社會化の形式」(Die Formen der Vergesellschaftung)を自己の對象となすに至つた。かくして社會化の純粹形式があらゆる社會的事象の内容の異質性に對して無差別に適用されることによつて、社會的事象の歴史的發展過程が看過され又は無視される結果をもたらしたのである。

然し今や蔽ひ切れぬ市民社會そのものの動搖は社會的事象の歴史的過程を顯はにせずにはをかかない。形式社會學がその極限に達して之に對する不滿の感情が誘發するや會ての綜合社會學に對する興味は俄然復興してきた。かゝる情勢の反映として歴史的社會的事象の全體的觀察を標榜して現はれつゝあるものが、アルフレッド・ウェーバア、ハンス・フライヤー、カール・マンハイム等の所謂「文化社會學」或は「歴史社會學」乃至は「政治社會學」之である。これらの新しき方向への諸々の試みに共通にして最も特徴的な性格は、何等かの意味で「歴史性の原理」をその體系の中に取り入れてゐることである。抽象的な純粹形式的構成を斥けて現實的社會過程のなまなましい生活感情を織り込んでゐることである。かくて形式社會學より文化社會學への發展は必然的

であり、後者は前者を止揚せるより高次の立場に立つものと云へる。而して文化社會學の設定する問題及びその解決の方法は社會學本來の根本的動向に一致してゐる。蓋し社會學の起源に緊密な關係にあつた歴史哲學的傾向が再び復活したからである。もともと社會學の實踐的性格こそその固有なる認識意志なのである。

以上に述べたる如く、經濟學に於ける純粹經濟學並に社會學に於ける形式社會學の理念の發展は、何れもその研究態度及び方法を當時支配的影響を與へつゝあつた自然科學的思惟の領域より得來りしは明瞭であるが、これに對し自己本來の認識方法を對象そのものの根源的性格より導出せんとする反對思潮が生起したのである。十九世紀初頭に於ける浪漫派經濟學の後を承けて四十年代より五十年代に至りて澎湃として起つたりスト、ロッシヤ、ヒルデブラント、クニース等の所謂舊歴史派經濟學等の勃興之である。これらの人々の主張は何よりも先づ重農學派並びに正統學派學說の自然科學的普遍法則の樹立に反對して歴史的具體的事態への注意を喚起し、法則の歴史的相對性を明かならしめんと努力した。然も彼等の認識の根本態度は古典派の如く表象的ではなく、意志的であり實踐的であつた。固より古典派の理論と雖も猶實踐の要求に應じない性質のもではない。乍然古典派の實踐は飽く迄も理論の應用であり、理論に於て發見されたる原理原則をそのまま經濟過程に應用すれば足りるのであつて、然もその場合法則とは自然的自由の前提の下に於ける體系なのである。各個の實踐的過程は「事例」としてその下に秩序づけ得るやうな「法則」の顯現なのである。かゝる法則は個人

主義的であると同時に宇宙主義的であり、従つてその中間に具體的實在たる國民的統一體を顧慮せぬ Kosmopolitisch な經濟學なのである。⁵⁾そこでリスト一派の舊歴史學派の人々の主張は一方當時澎湃たりし國民的感情と、他方千八百二十年代に於て漸く産業革命の技術が採り入れられたと云はれる獨逸の國民經濟の實情を洞察し、正統學派の宇宙政策的方向に對して國民政策的見地を高調し、「政治的・經濟的國民統一體」(Die politisch-ökonomische National Einheit) の性格を明かならしめたのである。

固より舊歴史派經濟學がその理論的仕上げとして尊重した經濟發展段階説はゾムバルトの擲揄せる如く、「ケネーよりロッシヤーに至るまで、リカアドウよりシュモラーに至るまで、彼等の紡いだ紡絲は結局同一物で唯番手が異つてゐるだけである」⁶⁾かも知れない。然し舊歴史派の認識意志は何よりも先づ實踐的「國民的」であつた。更にその後を承けて一八七、八〇年代に於けるシュモラー、ワグナー一派の所謂新歴史派の人々の認識關心もやはり實踐的であつた。たゞその實踐的方向が前者にありては「國民政策的」(nationalpolitisch)であり、後者にありては「社會政策的」(sozialpolitisch)であつたに過ぎぬ。然も何れも經濟理論の歴史的感受性の豊富なること、並びに認識の基礎が意志的、世界觀的、實踐的なりし中にこそその最も強大なる力があり、歴史的具體的經濟問題に對する斷乎たる意欲があつたのである。

マーカンテイリズムの成立と共に經濟學の獨自の課題として運命づけられたかの政治的實踐的性格は、獨逸新舊歴史派經濟學に承繼がれてよくその任務に堪えてきたのである。乍然翻つてこの非正統派經濟學の科學的

5) Fr. List, Das Nationale System der Politischen Ökonomie, 1841, Ges. Werke, Bd. 6. S. 161 f.
6) W. Sombart, op. cit., S. 154.

武器、その方法論的基礎だけではどうであつたであらうか。仔細に考察すればこれらのものは強力な論敵に向つて戦を挑むには全く不十分なことが判明したのである。このことは彼等が科學的根據をもつて古典派理論を攻撃せんと企てた瞬間に曝露されたのである。十九世紀の末葉及び廿世紀の初頭にかけての二つの論争、メンガー對シュモラーの「方法論争」(Methodenstreit)並びにウエバー對シュモラーの「價值判斷論争」(Werturteilstreit)即ち之である。吾々はこれらの二つの方法論争に深く立入つて敘述する餘裕はないのであるが、これら何れの場合にありてもシュモラーの方法論的根據がメンガーの精密論理やウエバーの批判論理の強力な武器に對してこれを撃破するに足るだけの充分なる基礎の缺けてゐたことは之れを認めねばなるまい。「三つの經濟學」の著者はこれを評して曰ふ「不偏不黨の審判官にして若し當時を回想するならば、弱者に對する一切の同情にも拘らず、このメンガー對シュモラーの一騎打でメンガーが勝利者たりしことは疑ひ得ない。そして又それにも拘らずシュモラーがメンガーの方法を否定したことの正しさをも疑ふことは出来ない。然しシュモラーはこれを論證し得なかつたのだ。彼は有利に戦つたが何が有利なりしかを知らなかつたのだ。彼は自己がそこより敵の戦線を撃破し得る點、それを知らなかつたのだ⁷⁾と。又ザーリンがこれに關聯して曰く「獨逸に於てはメンガーに對するシュモラーの戦に於て、個々の點ではシュモラーのあらゆる論戦は全く支持し得ないものであるとしても、然もあるしつくりしない内的感情が表現されてゐて、それは事實上リカアドウの古典派に對する場合と同様にメンガーの限界利用説に對しても同様であつた⁸⁾」さてこゝでも「シュモラーの人間的で科學的な直

7) W. Sombart, op. cit., S. 154.

8) E. Salin, Geschichte der Volkswirtschaftslehre, 2. Aufl., 1929, S. 96.
高島善哉譯「國民經濟學史」二三一頁。

覺がある正しいものを擲んでゐる。だが彼の意圖及び目標を理路整然と敘述するに必要な科學的及び哲學的明瞭さを缺いてゐたことをひそかに思ふ時始めて、シュモラーの安全さと勝利の確實さとを解し得るのである⁹⁾。

同様にマックス、ウエバーとの論争に於てもシュモラーはその論理の嚴密性に於ては所詮ウエバーの敵ではなかつた。ウエバーはシュモラー流の經濟學と倫理學及び政策學との不潔なる混淆に對しては完膚なきまでの純化作業を行つた。そして科學より價值判斷を除去することによつて科學的認識の「客觀性」を擁護せんとした。かゝる沒價值判斷的要求は、それが科學的良心を鋭くし集團や黨派の立脚地に基く利益的評價や素朴な倫理的評價との救ふべからざる混淆を排除した限りに於ては効果があつたが、それにも拘らず、それは全體としては「客觀性」なる幻想の爲めに惱まされ「價值判斷排撃のための戦ひ」が獨逸の一時代から勞作への勇氣を全く奪つたことは疑ふべからざる事實である¹⁰⁾。

新舊歴史學派はその抱ける意圖の正しさにも拘らず、問題自身に潜む困難の故に遂ひによく強き自己貫徹性を示す事が出来なかつた。つまり彼等の認識意志を充分に説得し得べき形の論理の平面に表現することができなかつたのである。蓋しシュモラーがメンガーの自然科學的精密論理やウエバーの文化科學的批判論理に抗議を申込む時に彼自身の依據せる認識原理もやはり根本に於ては彼等の方法態度と共通なるものを分ち持つてゐたのである。すなはちシュモラーの科學概念そのものが根本に於てはメンガーやウエバーのそれと同一次元にあつたといつても差支ないのである。紡ぐ糸は同一でたゞ番手が異つてゐたに過ぎないのである。さればこそ

9) E. Salin, op. cit., S. 89. 邦譯、二一六頁。

10) E. Salin, op. cit., S. 102. 邦譯、二四五頁。

かの二つの論争に於てシュモラーはたゞ空しき抵抗を試みたに過ぎないのである。乍然この二つの論争に含まれた問題そのものは再び取上げられなければならない。これら二つの論争は従來の經濟學の歴史の發達に於ける最も顯著なる二つの出來事であるのみでなく、同時に經濟哲學の將來の發展にとり最も重要なる刺戟の源泉であると云はねばならない。¹¹⁾

理論と歴史、理論と政策、この二つの問題は今や新なる科學概念のもとに一舉にひとつの問題として解決されなければならない。歴史と理論と政策とが全く「部分諸科學」として相互に分離し孤立化して處理されてきたのは、前代の科學概念の分化過程の行き過ぎた結果に外ならないのであつて、實はこれらの三者とも對象の統一的聯關の三つの契機として把握されなければならないのである。歴史と理論と政策とではなく、歴史的政策的理論としての認識の構造とその對象の聯關とが明かにされなければならない。然も理論の歴史性も實踐性も何らか構成的方法の恣意的刻印によるのではなくして、對象そのもの、独自の存在の仕方、デイルタイの所謂「事態の理性」(Vernunft der Sache) そのもの、性格なのでなければならぬ。理論はもはや完成せる全體の體系的概観ではなく、その内在的必然性の補足的洞察でもなく、既在し將來する現在の生起の自覺なのである。然もかゝる生起はひとつの統一的意味聯關を形成し、吾々の認識意志は常にかゝる歴史的な生起の「情況感情」(Situations gefühl) と結びつき「實踐意識」に結合するのである。經濟理論は社會學其他の社會諸科學と同様に常に實踐的課題を擔つてゐる。こゝに於てはもはや純粹經濟學の理念は、現代に解決を迫まりつゝある實踐的

11) S. Unger, Geschichte der Wirtschaftsphilosophie, 1931, S. 68.

課題に耐へず、従つて現代の新しき學問意識の相容るゝ所ではなく、本來の意味に於ける政治經濟學の理念がこれに代りて現はれねばならない。

二

上述せる如き意味に於ける政治經濟學の理念を充實すべき任務をもてる經濟政策學が今日に至るもなほ依然として一個の學としてその確實なる進路を進んでゐないのは抑々如何なる理由に據るのであらうか。吾々の根本的疑問は先づこの問ひを發する。吾々はその理由を次の事實に求めなければならぬ。すなはち從來の政策學的認識がその根本問題の省察にあたりて、單純に價值判斷乃至世界觀それ自身の「客觀性」如何なる不毛な問ひに拘泥し、實踐的認識としての經濟政策學の根本問題が何よりも先づ、「歴史的實踐的情況」(geschichtlich-praktische Situation) そのものゝ構造分析に潜む所以に思ひ及ばなかつた爲めではあるまいか。政治經濟學がその學問的確立の問題に關して、そのままに進むべき進路を發見し得んが爲めには、既往の歴史に根強くも纏はれる「價值判斷論争」の果しなき鬭争の戰場を脱却することにあらねばならぬ。政策的認識の重心が單純に世界觀や價值判斷の問題にあるのではなしに、寧ろ歴史的實踐的情況の分析にあり、その意味に於て經濟的過程に貫徹せる政治や技術の作用が中心問題とならねばならぬと思ふ。これまで政策目的の客觀性の問題が經濟學的認識に於ける暗礁地帯をなし、従つて長く勞作への勇氣を失はしめたのは、常に目的それ自身の客觀的妥當

性なる不可能なる問題に没頭し、歴史的實踐的情況に於ける目的を問はうとしなかつたところに歸因するのである。經濟的實踐の目的が經濟的發展のある一定の段階に於ける歴史的實踐的情況に於て規定されるのでなければそれ自身としては何等の意味も持ち得ぬのである。これらの點はあくまでも高調せられねばならない。

尤もかく論斷することによつて價值判斷の問題を未解決のままに放棄することを意味しない。云はんと欲する意味は、政策的認識に於て必然的に伴ふところの價值判斷の問題は歴史的實踐的情況の構造分析そのものの中に自ら明かになるものでなければならぬといふことなのである。ヴェルブラントの所謂「分析的理想」(analytisches Ideal)とはかくる意味に解せらるべきものである。價值判斷の客觀性といふ問題を *an sich* に採り上げてその一般的可能性を論證することの無益なるを指摘するのである。吾々はこの點に關聯してゴットルの價值判斷に關する分析を吾々の問題展開の手懸りたらしめたい。

ゴットルは彼の大著、「經濟と科學」第二卷に於て價值判斷に就いて興味ある考察を試みてゐる。彼によれば、總ての價值判斷の作用様式を總觀するならば、五つに分れるといふのである。先づ人格的心意に全くかゝりなき價值判斷として第一に論理的價值判斷 (logische Werturteil) を擧げる。この判斷は絶對的に「思惟適合的」(Denkrichtige) な判斷であり、判斷の決意はまさしく論理學が保證する。第二は目的論的又は技術的 (Teleologische od. Technische) 價值判斷であり、これは經驗的に思惟適合的な判斷であり、目的手段の關係に於ける合目的性に關する「事物適合的」(Sachrichtige) 判斷である。判斷の決意は行動の一切の技術論たる技術

1) F. v. Gottl-Ottlilienfeld, *Wirtschaft und Wissenschaft*, Bd. II, 1931, S. 837-867.

學がこれを保證する。而して以上二つの價值判斷は何れも判斷する主體の人格的心意に全く無關係に行はれるものであるが故に、充分なる客觀性を以て科學の領域に於て主張せられ、これに關しては價值判斷論争の起り得べき餘地のないこと全く明かである。然るに以上二つの價值判斷に對して第三に擧げられる倫理的(Ethische)價值判斷及び第四の觀念的(Ideologische)價值判斷に至りては、判斷は人格的心意との結合なしには考へられない。而して兩者の區別せられる點は前者が人間の共同生活の立場から「生活適合的」(Lebensrichtige)に行はれるのに對し、後者は何らか究極目的に合目的なる觀點より特に「心意適合的」(Gesinnungsrichtige)に行はれる點にある。これら二つの價值判斷に於て、前者には道德性の要求が、後者には主觀性の要求が餘りにも強きが故に共に普遍妥當性又は客觀的説服力に缺け、科學の領域に於ては黜けられねばならない。最後に以上四つの價值判斷の何れにも屬せざるものとして存在論的(Ontologische)價值判斷が考へられる。

この價值判斷は「形成せらるべきものゝ存在の仕方」に一致する程度に應じてあらゆる形成的作用の段階づけをなす」(S. 850)のである。さればこの價值判斷は經濟するものゝ形成的方向を指圖する場合にはつきりと、「かくすれば社會的形成態の存在の仕方により適合的、従つてより生活を促進せしめることを立言する」(S. 850)のである。この價值判斷は飽くまでも社會形成態の「存在の仕方」(Seinsweise)に着眼して判斷する故に、彼はこれを「存在適合的」(Seinsrichtige)價值判斷と稱して前四者のそれと區別してゐる。固よりこの場合存在論的價值判斷といふ名稱それ自身が問題なのではなくして、たゞかゝる第五種の價值判斷が區別せられるといふ事

態が問題なのであると断つてゐることは云ふまでもない。然らばこの存在論的價值判斷の客觀性は如何に解すべきか。ゴットルによれば、この價值判斷は固より第三第四の場合と同じく人格的心意の觀點から、及び人間的共同生活の生活促進といふ觀點から判斷せられるが故に、これら兩者と極めて密接な關係に立つことは云ふまでもないが、然もそれは飽くまでも形成せらるべきもの、當體の存在の仕方適合せる判斷たる點に於て「寧ろそれは經驗の堅い地盤に深く根差し、従つてそれは言ひ表はしとしては全く充足理由律に還元される。それが唯正しく判斷される限り、普遍妥當性が許される。この普遍妥當性が嚴格に監視さるべき科學の領域への仲間入りを確保する」(S. 855)と主張せられる。このことは更に實踐的の行爲としての經濟政策に於ける價值判斷と理論としての經濟學に於けるそれとの關係を述べるに際して、前者が「存在當爲」(Sein-Sollen)を取扱ふのに對し後者は「存在必然」(Sein-Müssen)を取扱ふとなし、存在必然についての價值判斷を存在論的價值判斷と規定してゐる點に於ても現はれてゐる。(S. 863)「存在論的價值判斷を以てまさしく來るべきものを精神的に前以て把握し、従つて豫言を行ふといふことを要求してはならぬ。存在論的價值判斷は一體何が生成するか (was einmal sein wird) の立言を援けぬ。それはたゞ生活自身を實現せんが爲めに生活の領域に於て何が在らねばならぬか (was sein muss) を確定するのみである」(S. 867)と述べてゐるのに徴しても明かである。かくして彼によればこの存在論的價值判斷は飽くまでも「經驗科學の領域にある」(S. 857)

以上の論述を顧みるならば、ゴットルは第一の論理的價值判斷と第四の觀念的價值判斷を一方はあまりにも

客觀的、他方はあまりにも主觀的なるを以て共に斥け、第二の目的論的(技術的)價值判斷と第三の倫理的價值判斷との結合の境地を第五の存在論的價值判斷に於て言ひ表はさんと志したものであらう。彼の云ふ「存在適合的」なる表現の中に、一方に於て經驗的に事物適合的であると共に他方に於て心意的に生活適合的たることを併せ想ひ、然も社會形成態(Soziale Gebilde)を企業の如き Ingebilde と國民經濟の如き Umgebilde とに分ち考ふることによつて、經濟形成の目標が「包括形成的に思念されたる價值判斷」(umgebildlich gemeinte Beurteilung) によるところの國民經濟的生活促進にあるとなす。こゝに於てはもはや Sein-Sollen と Sein-Müssen との間に横はる間隙はまさに紙一重であつて、それは謂はゞ存在論的範疇とも名づけらるべき Seinsweise の中に埋合はされてゐると言つてもよい。さればゾムバルトが「三つの經濟學」に於てゴットルを規範的經濟學として取扱ひ、その認識方法を實用主義的(Pragmatisch)として手痛く批判せる論點も亦この當爲命題と必然命題との同一視にありと云ふのである。²⁾ 固よりゾムバルトの認識論的立場より見れば、かゝる批判の生ずるのは見易き理であり、「二つの互に全く異つた認識方法の不誠實なる混同」であり、「成り上り者の堪え難い様式の混合」でもあらう。又ゴットル自身にありてもその着想の正しさにも拘らず、猶自らは科學的客觀性なる幻想に捉はれて、存在論的價值判斷の概念規定に多少不明瞭なる箇所を残し、これは更に深き省察を要すべきものであらう。

然し乍らゾムバルト自ら彼の所謂理解經濟學(Verstehende Nationalökonomie)の確立にあたりて行へる認識

2) W. Sombart, op. cit., S. 63, 73.

過程にも同様にこの問題の困難なる處理に付まねばならぬ所以を悟つてゐない。彼が形而上學として斥けた規範的認識方法並びに理解經濟學の前史として規定した歴史學派の認識方法が、それが何れも價值判斷の要素を含むが故にウエバーと共に沒價值的立場を守株するゾムバルトの斥けるところとなつたのであるが、然しこの價值判斷が如何に新なる装ひを凝らして理解經濟學の認識方法に潛んでゐるか、又かくしてこそ始めて理解的方法が單に概念的方法と異なる認識方法として實を結ぶ可能性をもつに至るかが明かにされねばならぬのである。

此の點に於てザーリンのゾムバルト批評の中には經濟學が本來あるべき方向に對して根本的に重要なものを含んでゐる。すなはちザーリンはゾムバルトの經濟學に彼の所謂歴史的直觀理論の重要な一つの形態を認めたのであるが、然しゾムバルトの理解經濟學にはザーリンの企圖せんとするが如き「實踐的政治的要素を含めて見る (mischen)」要求がまるで缺けてゐる。ザーリンはゾムバルトより以前に經濟的思惟の發展を三段に分ち、政治的經濟學、體系的經濟學、歴史的經濟學となし、最後の歴史的發展的經濟學が如何にして實踐的政治的理論として正しく確立されるかに經濟學の本來の課題と歸趨とを見出してゐる。ザーリンと共に言ふならば、「ミユラー、リスト、クニースが据えつけた基礎の上に今や現代の芳作は一つの直觀的、有機的・歴史的、國家的・政治的理論の究極的建設を志さねばならない」と。ザーリンの問題提出はまことに時代の要求の核心を衝いたものであつて、經濟學はその誕生以來實踐的課題を擔ふ政治經濟學として確立さるべき認識意志を有

3) E. Salin, op. cit., S. 102. 邦譯二四六頁。

するのである。然もゴットルよりゼーリンへの道は唯の一步であつて、何れも現代の動かし難き學問情況並びに方法意識を共通にしてゐるのである。蓋しゾムバルトの理解的方法の目指す本質聯關の認識は經濟事象の「独自の存在の仕方」を明かにすることであり、ゴットルの存在論的價值判斷は社會的形態としての國民經濟の「形成せらるべき存在の仕方」に適合的な價值判斷に外ならぬのである。

このやうに認識の方法態度が體系構成的理念の選擇の自由によりて規定せられるのではなくして、事態の独自の「存在の仕方」によりて規定せられる。つまり認識主觀の恣意的構成を斥けて所謂「事態の理性」に聽かんとする態度が支配的になつてきたのである。方法の根據は歴史的社會的現實在それ自らの客觀的組成そのものであつて何らか形式論理的觀點ではあり得ない。こゝに於ては方法といふ意味が全く變つてきたのであつて前代の學問概念に於ける方法と同一視せらるべきではない。方法は事態に對して外からもつてこられるのではなく、事態そのものゝ存在の仕方から汲みとられなければならないといふ態度の轉換は根本的である。概念的な方法といふときはそれに於て認識對象が構成せられる方法なのであるが、それに對してゾムバルトなどのいふ理解的方法は決してそのやうな意味に於ける方法なのではないのであつて、恰もギリシア語の *καλυπτεται* が隠蔽されたるもの *Verborgtheit* を發見する (*Entdecken*) といふ意味に於て「眞理」を表はすやうに、⁴⁾ 方法とは事態の本來的存在の仕方を開き示す (*Erzhissen*) 在り方に外ならぬのである。比喩的に云へば對象に話しかけるのではなくして對象の語るロゴスに耳傾けんとする態度である。「事態そのものへの忠實なる歸依」が問題

4) M. Heidegger, Sein und Zeit, Erste Hälfte, 2. Aufl., 1929, S. 33.

なのである。かゝる認識態度の轉換は云ふまでもなく學術的實存の現實性への要求が然らしめたのであつて、それが現象學的と名づけられようと存在論的と名づけられようと將又實存論的と名づけられようと、現代の學問的情況の現實的性格を言ひ表はすに於ては一である。

然もかゝる「存在の仕方」が單に表象的に *Vorhanden* する事物の存在の仕方ではなしに、情意的に *Zuhandeln* する存在者の存在の仕方とその本來的意味を見出すところからして、存在の仕方そのものが根源的に實踐的過程に於てのみ開示される。吾々はかゝる事態を「實踐的情況に於ける存在の仕方」と名づけようと思ふ。吾々の固有の仕事場はすなはちこゝにあるのであつて、問題のやゝ長き迂回の後吾々は更に實踐的認識の根本構造を實踐的情況に於ける存在の仕方にて展開せねばならない。

三

吾々の場合に於て根本的範疇たる「存在の仕方」なる一般的表現は實踐的生の存在の仕方として常に「情況」として把握されねばならぬことは右に述べた通りである。吾々に最初に與へられたるものは「情況」である。一切の問題は情況に於て提起され一切の問題は情況に於て解決されねばならぬ。情況は生成しつゝあるものとして無限の既存を自己のうちを含みつゝ同時に無限の將來への實存可能性を決意せる現在の場所である。それ故に情況は固定的普遍的なものではなく休みなく存在決定を實現しつゝある歴史的な過程である。實踐的生は

その絶え間なき流動の過程に於て自己を表出し客観化する。生は決して完成を知らぬ飽くなき創造の過程に生動する。蓋し實踐的生はそれが苟くも生である限り決して自己自身に於て常住することなく、自己の措かれたる状態を否定する。生はかゝる動的性格の故に常に生成の中にあり従つて實踐的生はさしあたり「生成の情況」(Werdende Situation)と名づけられよう。更に實踐的生はそれが單に既に在ることを否定する生成的性格だけではなしに同時にある新なる状態に對する積極的「決意の情況」(Entschliessende Situation)として決意的性格を含むのである。新なる状態のみがそれが未だ尙現在せぬ限り決意の對象として意欲されるのである。されば生の實踐的情況に於てはどの状態もそれが未だ尙現存せぬ限り意欲され、それが既に現存する限り否定せられるといふ二重の相貌を呈するのである。かくの如くにして實踐的生の如何なる状態も休みなき生成の中に流動し決意に於て定向する。一方に於ては實踐的情況はそれが決意の情況として終局性(Endgültigkeit)に向ひつゝ、他方に於ては同時に生成の情況として非終局性(Unendgültigkeit)に向けられてゐる。

實踐的情況のかゝる矛盾は實踐的生の内在と超越との對立である。情況とは生の内在と超越との相剋に充ちた統一である。ジムメルの所謂「よりよき生」(Mehr-Leben)と「生以上」(Mehr-als-Leben)換言すれば生物的生と精神的生との統一者としての「絶對的生」(absolutes Leben)の綜合過程はすなはち之である。生は單なる生ではなくして絶對的生であり、かゝるものとして狹義の生と生から自由な内容との間の相對的對立を包括するものとなる。従つてかゝる二元の相剋は生の統一性に矛盾するものでないばかりでなく、生の統一性が實存

するところのまさにその仕方である。¹⁾ かくの如く絶對的生は自己分裂の相剋的二元の相に於てのみその實存の仕方をもつが故に、その統一性は過程の中にのみ存すると云はねばならない。情況とはまさにかゝる過程に外ならず、それは従つて純粹なる他在（非存在）でもなければ又純粹なる自在（存在）でもあり得ないところの「相對的他在」(relatives Anderssein)とも謂はるべきものであらう。されば實踐的生は存在と非存在との間に於ける中間的なるものである。²⁾ 存在と非存在とは内在と超越として實踐的生に實存せるものである。意欲は存在への意欲たると共にそれが意欲たる限り同時に非存在の表現でなければならぬ。當爲(Sollen)の感情もまさしくかゝる意欲と同一の構造を有し非存在と存在との中間的狀態にあり、定義できぬものであり、それは完成を知らぬプロセスである。³⁾

實踐的生はまさに存在するものではなくして常にプロセスであり、決して全體として達し得ぬところのあるものである。生は何ら固定せるものでなく、疑ふ餘地のないある絶對者でもなく、一切の經驗一切の思惟に固着せる足場でもない。一切のものは流れ、破碎されるものゝ休みなき運動である。生は「常に形式を形成すると同時に常に形式を破壊する生」(ジムメル)として無限の自己超越の過程にある。生のより重き自己克服は精神としての生のひとつの悲劇的性格を示すものに外ならない。而してかゝる絶え間なき運動過程の中に生成するのは、ヤスパースによれば、實踐的生が「主體・客體の分裂」(Subjekt-Objekt-Spaltung)の形式の中に實存するからであつて、かゝる生の二伸背反的構造こそ彼の所謂「限界情況」(Grenzsituation)の性格を現はすの

- 1) G. Simmel, Lebensanschauung, 2. Aufl., 1922, S. 24. 25.
- 2) P. Haerberlin, Das Wesen der Philosophie, 1934 S. 13.
- 3) G. Simmel, Einleitung in die Moralwissenschaft Bd. I, 1904, S. 7-9.

である。⁴⁾

以上述ぶるところによつて、存在と非存在との間に於ける實踐的生の緊張としての情況の第一の性格は「時間性」(Zeitlichkeit)にあることは明かであらう。時間性とは實踐的生の生成性格に外ならず、従つて情況とは時間の中にあるのではなくしてそれ自ら時間性として、すなはち存在と非存在との間に於ける絶え間なき決意的生成として時間を自ら「時成」(zeitigen)せしめるのである。かゝる生ける時間としての時間性はその中に於て何か作用や運動が起る媒体や次元ではなくして、實踐的生が意志的實踐的である限り情況そのものゝ性格である。實踐的生は「情況内存在」(das-In-der-Situation-Sein)としてのみ實存するところから、時間性は情況内存在に屬し情況内存在の實踐的決意的生成的性格を示すものと云ふべきであらう。

時間性は存在するものではなしに時成するものである。時間性は色々な可能性に於て色々な仕方では時成し得る。實踐的生の根本的可能性は、實存論的に云へば、この時間性の時成に基づいてゐるのであつて、時間性の時成の様相が實踐的生たる「現存在」(Dasein)の根本構造に外ならぬのである。而して「現象的根源的に時間性が經驗されるのは、現存在の本來的全體存在に於て、即ち前走的決意性(die vorlaufende Entschlossenheit)に於てである⁵⁾」情況といふのはつまりかゝる實踐的生の本來的全體存在可能としての前走的決意性に於て開示されたる Da であつて、かくして實踐的生は常に Dasein するのである。情況は單に生成の情況ではなしに決意の情況であり、然も前走的決意の情況であるところから、常に情況内存在としての現存在は「有意義性」

4) K. Jaspers, Psychologie der Weltanschauungen, 3. Aufl., 1925, S. 229.

5) M. Heidegger, Sein und Zeit, S. 304.

(Bedeutsamkeit) といふ環境世界の歸趨聯關を理解し開示してゐる⁶⁾。決意性は「何かのため」(Worumwillen) の決意でなければならぬからである。

情況は單に既在から現在を越えて將來に延びる連鎖を形成するといふ意味の時間性ではなしに、「既存しつゝ現前する將來」(Gewesend-gegenwärtigende Zukunft) としての時間性、即ち前走的決意性に於て開示せられるといふところからして、更に第二の「現前性」(Gegenwärtigung) といふ性格をもつ。情況は前走的決意性が實踐に於て把握するものを間違ひなく出會はしめる爲めには、環境世界に於ける歸趨聯關を現存在に現前せしめる (Vergegenwärtigen) といふ意味で現前的でなければならぬ。かくの如く現前せしめられたる環境世界の歸趨聯關に基づいて、個々の指向存在者の歸屬性が決定されるのである。従つてかゝるウムジヒト的配慮 (Das umsichtige Besorgen) にとつては情況の現前性の性格は極めて重要である。

かくの如く情況は現前的であるといふこと、關聯して第三に「展望的」(Perspektivisch) である。情況を現前的たらしめるためには、將來の前走的決意性により全體的存在可能のホリツオントに於て現在を見るといふ意味がなければならぬ。然も此の場合情況に於ける全體的存在可能の把住といふも、それはたゞ全體への方向づけの可能なる展望性の把握に外ならないのである。何か絶對的全體そのものを見るのではなしに、たゞ全體に於て展望的に見るに過ぎない。情況に於ける形成過程は常に展望的に實踐されねばならぬ。相對性に於ける展望的形成が情況の最も重要な性格の一つである。展望とはホリツオントに於ける展望である。ホリツオント

6) 環境世界の歸趨聯關的構造については拙稿「政策的認識の問題」(東京商科大学研究年報、經濟學研究3所載)を参照。

トは「開かれたる可能性」(die offene Möglichkeit)であり、それは刻々に生成轉移して已まぬ可能性である。ホリツオントは Lebenshorizont として個々の事物を具體的環境の具體的場所に位置づける全體布置であると共に、それは Zeithorizont として時間的生成運動の全體過程を表はす。

以上の時間性、現前性、展望性なる諸性格に加へて更に實踐的情況の「理解的」(Verstehen)性格を明かにしなければならぬ。理解といふ言葉で現はされる精神的態度は、通常心理學的又は解釋學的方法として重要な意味をもつてきたのであるが、然し理解といふ言葉の本來的使用から云へば理解は「情況理解」(Situations-verstehen)として最も實踐的意味に用ひられねばならない。吾々は理解といふ言葉をひとつの根本的實存論的存在の仕方と考へるのであつて、理解は何か説明及び概念的把握とは違つたものとしての或る特定の種類の認識でもなければ、又一般に主題的把握の意味に於ける認識でもない。吾々のいふ理解は、認識から生じた知得ではなしに、根源的に實存論的存在の仕方であり、この存在の仕方こそ何よりも先づ認識や知得を可能ならしめるのである⁷⁾。

理解は現存在の最も根源的な存在の仕方として、將來の存在可能を豫料し同時に企畫するといふ存在の仕方をとる。理解は第一次的に將來に基礎を置き、理解の時間性に於ける時成は第一次的に將來から遂行される。情況は根源的可能性として將來から時成するが故に常に實踐的、理解的、企畫的たり得るのである。企畫(Entwurf)とはそれに従つて現存在が自己の存在を方向づけるといふやうな、何か考へ出されたるプランに對して

7) M. Heidegger, op. cit., S. 336, 123.

態度をとるといふことは全く關係がない。却つて現存在は「情況内存在」として第一次的に既に自己を企畫し、又情況内存在である限り絶えず理解的に企畫しつゝあるのである。理解のかゝる企畫性格は、理解がそれに基づいて企畫するところのもの即ち本來的可能性を自ら既に把住してゐることを示すのである。企畫は現存在の第一次的存在理解と共にある。かくして理解とは企畫として現存在が自己の本來的可能性そのものであるところの根源的存在の仕方である。

實踐的生としての現存在のかゝる企畫的理解の存在の仕方は環境世界の開示に對して根本的である。すなはち現存在の企畫は環境世界の歸趨聯關たる有意義性全體のために企畫されるところから、環境世界の存在構造もかゝる企畫することの中に開示されるからである。環境は情況に於て最も顯はになるといふ意味も理解の企畫的實踐に基づく。環境はそれが單に *Vorhanden* する自然世界ではなしに、*Zuhanden* する道具世界 (*Zeugwelt*) として有意義性の歸趨聯關的構造をもつ。環境に於ては、個々の事物は *Um-zu* といふ指向的存在の仕方をとることによつて道具的性格を有し、そして道具の *Woraufhin* としての有意義性は前走的決意性に於て開示される「地平的展望の意味」(*der horizontal perspektivische Sinn*) を表はす。かくして道具世界として環境の全體布置 (*Gesamtkonstellation*) を規定するものはかゝる動的全體意味である。理解とはとりもなほさず地平的展望の意味の理解であつて、展望の意味はたゞ實踐的情況に於てのみ開示される。情況に於ては全體の形成的意味方向が本來的存在可能性に向けられてゐる。かゝる情況に於ける根本構造を吾々は「形成的意味聯

關」(Gestaltungsinzusammenhang)と名づけ、環境に於ける道具的構造を「形態的意義聯關」(Gestaltsbedeutungszusammenhang)と名づけたい。情況が環境を規定し、形成的意味が形態的意義を規定する。理解は第一次的に常に情況理解として情況に於ける生起の形成的意味を企畫的に理解する。理解概念の最も根本的な意味はこゝになければならぬ。

然るに實際に於ては理解なる概念は客觀化された精神の意味解明として次の如き意味に用ひられるのを通常とする。すなはちフライヤーなどによれば、客觀的精神といふ形成態は二様に解明せられる。ひとつは心理學的觀相的意味解明であり、他は客觀的對象的意味解明である。第一の心理學的理解は心意的構造の統一點即ち個性的性格、一定の特質をもてる社會心意など、ある心的全體へ導かれる、デイルタイなどの言葉を以てすれば心的構造聯關へ導かれるのであつて、個々の意味づけられるものはこの心的構造全體の表現として理解されるのである。これに對して客觀的理解は對象的にある纏まりをもてる事態や事物聯關、意味的命題へ導き、何らか心理的内容や心意的實在への還元とは獨立にその表現價值を得るのである。而して精神科學はこの後者の課題を類型學(Typologie)の形式に於て企てつゝあるといふのである⁸⁾。フライヤーのかゝる解釋と同じく精神科學に於ける理解の問題を右の客觀的對象的理解に重點を置くものとして、シュプランガーの sachliches Verstehen とかゾムバルトの Sachverstehen を指摘することができよう。然しながらかゝる理解概念は前述せるが如き環境に於ける形態的意義解釋とも呼ばるべきものであつて、それには何等實踐的情況に於ける形成的意味

8) H. Freyer, Theorie des objektiven Geistes, 2. Aufl., 1928, S. 50f.

理解の概念が含まれてゐない。環境を固定せるものでなく生成するものとして動的過程に於て把握する企畫的決意性が情況を現出し、かゝる情況に於ける理解は單なる既存的事物聯關の把握を超えて形成的意味聯關構造を把住するものでなければならぬ。

固より環境的形態聯關と情況的形成聯關とは具體的には *real* に共在するのであつて、全く相互に無關係なものではない。然し形態聯關は形成聯關の方向、秩序、根據に基づいてのみ規定せられる。情況に於ける地平的展望の意味の前走的把持なしには、環境の道具的指向的意義は一義的に解釋されぬのである。この意味に於て形成的聯關は形態的聯關に對して實存論的優位を保つと云はねばならない。

以上述ぶるところによつて實踐的情況の諸性格が明かになつたとすれば、政策的認識に於て最も論議多き價值判斷の問題考察に根本的な光を投ずることにならう。政策的實踐に於ける價值判斷は何らか個人的主觀的恣意に根差し、又は世界觀的信仰から導き出されたものではなく、常に實踐的情況に於ける價值判斷として時間性、現前性、展望性、理解的等の諸性格の統一的形成的意味を含む價值判斷たるべきであらう。價值判斷そのものゝ客觀性を論議する價值判斷論争が決して吾々の問題たるべきでなく、歴史的生起としての實踐的情況に於ける價值判斷のみが吾々の研究の對象たるべきであり、その意味に於て何よりも先づ歴史的實踐的情況の具體的分析こそ政治經濟學の第一の課題でなければならぬ。かくて吾々は必然的に國家と經濟、經濟と技術とが相互に交流し合ふ經濟過程の分析に導かれるのであるが、これについては後の機會を待たねばならない。

——一九三七、一、二五——